OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴァレリーと時間
Author(s)	井上, 直子
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 175-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴァレリーと時間

井上　直子

ベルグソンより10年ほど遅く、プルーストと同じ年に生まれたヴァレリーは、記憶というテーマをめぐって思索を押し進めた先の二人と同様、記憶や時間に関する多くの考察を残す。では、「時の経過」という問題は、ヴァレリーにとってどのようにとらえられるのか。

その考察の多さにも拘らず、ヴァレリーの思索の跡をカイエの中に辿り、それをまとめて「時間論」という言い方でくくることはできない。なぜなら、ヴァレリーは「時間とは何か」という形式の思弁を徹底的に拒むからである[1)]。また、時間に関する断章であっても、そこには感覚、システム、心理学などに関する概念がちりばめられ、それらを解釈しようとすれば、結局ヴァレリーの思想全体をとらえようとせざるを得ない。さらに、カイエのみならず、ヴァレリーの散文詩に多く見られる、目覚め、光などに関する描写も、時間の経過に関連していると同時に、精神の動きを記述したものでもある。つまり、このテーマに関するヴァレリーの思索は、時間を概念としてとらえる形の「時間論」にまとめられるのではなく、自身の精神活動の探求の一環としてとらえられるのである。

本論では、カイエに見られる時間、記憶に関する断章を手がかりに、時間という問題が、ヴァレリーの思索の中でどのように位置づけられるのかを示し、精神活動において、過去、現在、未来がどのような意味を持っているのかということを見ていく。

1. 時間の幾何学

ヴァレリーの時間に関する考察は、精神活動の把握というヴァレリーにとっての生涯のテーマから生まれている。その始まりをはっきりと示すのが、1898年1月にフルマン宛の手紙の中で書かれた、「普遍算術」の問題である。ヴァレリーは、心的状態をそれ自体としてではなく、その変動や軌跡からとらえようとする。その上で、不規則な運動の中に潜む一本の固定的な線を見つけようとする。それが見つかれば、いかなる運動も規則性を持つものとなり、主体はそれを何度も再生産することができるようになる。そこに至るために、心的状態に何らかの操作を

ヴァレリーの作品参照は、Paul Valéry, *Œuvres*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», t. I-II, 1957, 1960（*Œ*, I, II と略記）、カイエの参照は、*Cahiers* fac-similé, Editions du C. N. R. S., 29 vols., 1957-1961（I-XXIX と略記）。カイエからの引用の（　）内のアラビア数字は、順にページ数、年代を表し、作品の参照の数字はページ数を表す。引用文中の下線はすべてヴァレリーによる。

1）「時間とは何か？―言葉である」（XIII, 474, 1929）、「時間とは何か、という問題は存在しない」（XXVIII, 140-141, 1944）など。

加えて処理しようとするのだが、ヴァレリーはその処理を一度に行うのではなく、一続きの状態として分析しようとする。この「一続きの状態」のところに、持続という時間の問題がからんでくることになる。それゆえ、ヴァレリーはこの手紙の最後で「心理学とは、時間の幾何学のようなものだ」という言葉を書き込んでいる。ここで、ヴァレリーの言う「心理学」について、フルマンへの手紙を引用しておこう。

> 例えば、僕が握りしめているこの現実界のある事物を想定してみよう。世の平均的な感覚にとって、それはいったい何か？それはかくも硬化した抽象に過ぎず、事物が感覚によってとらえられることはほとんどなく、精神は直ちにこの感覚をゆがめ、それを出来合いの像に一致、符合させてしまう。ここから、世に普通行われる抽象化が始まるのだ。僕の仕事は、そこで、この連合を打ち破り、対象をあるがままに、名を持たぬ切れ切れ、その抽象的系譜からは切り離された事物として物理的に見直すことだ。（『ヴァレリー全集』、筑摩書房、補巻 1、1979 年、477 頁）

ヴァレリーは、既成の概念に基づいて対象を認識する代わりに、感覚に基づいてとらえた事物を「名を持たぬ切れ切れ」の状態から新たに認識し直そうとする。この状態は、散文詩に描かれる、夜明けや目覚めの世界と同じである。こうした世界は、まだ手をつけられていない全体として現れる。「全体とは萌芽である。部分がないものと感じられた全体 ――黄金の中に目覚め、芽生えた全体、いかなる特別な愛着にもまだ損なわれていない全体」（*Œ*, II, 658）[2]。この手つかずの全体に向かい合う際に、ヴァレリーはそれを自分の感覚で先入観なしにとらえ、その混沌とした現象全体の中に、連合（séquence）を見いだそうとする。この手紙が書かれたのと同じ年、ヴァレリーはカイエに「一つの知的な相の具体的研究の中に、精神的な時間の諸条件を探すこと」（I, 368, 1898）と記す。また、翌年の 5 月、『メルキュール・ド・フランス』誌に掲載された「タイムマシン評」では、この「時間の幾何学」という言葉が再び取り上げられ、自分の認識方法について詳しく解説されている。このエッセイでヴァレリーは「時間を、認識しうるものの総体のある種の分割と見なす」と書く。心的現象を一度に把握しようと考えるのではなく、分割して、いくつかの一続きの操作によって解体しようとするのである。時間の幾何学という言葉は、ここで「意識の諸状態がいかにして互いに置換され、いかにして互いに他を反映するかを示す法則の要約」（*Œ*, II, 1459）と定義づけられている [3]。

2）ヴァレリーの散文詩の一部は『邪念その他』『あるがまま』などに収められて刊行されている。また、未刊行のものも含め、カイエの中の散文詩は 2000 年、ミシェル・ジャレティによって編纂され、ガリマールのポエジー叢書から出版されている。ここで描かれる世界は精神活動の比喩になっていて、太陽が高く昇り、光があふれる状況、はっきりと覚醒した状態は、いずれも精神の明晰さを現している。これに対し、夜明けや目覚めといった不安定な状態は、心的現象がまだ混沌とした状態にあることを反映している。

3）カイエにも «Time's geometry.»（I, 670, 1899）という記述が見られる。のちに、ヴァレリー

このような思想を中心に据えてヴァレリーの時間への考察は展開されるのだが、そこにはカント、ベルグソンをはじめ、何人かの哲学者の名が書き込まれるものの、特定の誰かの思想に共鳴することは見られない。例えば、ベルグソンについては、持続について反駁する形で、「連続性＝持続というのは、人がある部分を固定する時に知覚されるものである」(VIII, 787, 1922)、とか、持続とは「「完了した現在」の破損と絶え間ない再構成によって、すなわち平衡の方程式によって、表されるべきものである」(XI, 264, 1925-26) などと記されるが、それはあくまでもヴァレリー自身が時間を固定してとらえようとしたり、現在を再構築しようとしたりする際に例として名を出したに過ぎない[4]。また、ヴァレリーは、カイエの中で、アインシュタイン、カルノー、カント、ベルグソンの時間論を列挙した後、「感覚・停止・隔たり・遅れ・予期としての時間」と書き、そこに自らの名として「すなわち V」と記している (XV, 259, 1931)。注目しなくてはならないのは、ここで挙げられる感覚、隔たり、遅れなどが、そのまま感性の問題、心理学の問題でのキーワードでもあるということだ。ヴァレリーの時間への考察は、哲学者たちの影響を辿ることよりも、個人的な思索として、感性、システムなどの主要なテーマとの関わりでとらえられるべきものなのである。

では、心的現象を把握することと時間との間には具体的にどのような関係があるのだろうか。

先に述べたように、ヴァレリーは「連続した状態」の中で心的状態を操作しようとするが、その拠点として、ある不動の点が必要であると考える。混乱した状態にある精神状態の中に固定点を見つけ出し、そこを基準として操作を施すと、混沌とした状態の中に秩序が生まれ、対象はある一定の動きを示すことになる。その結果、現象は何度か同じ状態に立ち戻り、観察が容易になる。ヴァレリーはこの「同一のもの」への回帰を、「現在」に結びつけて考察する。「まず、現実の生きた系をいかにして循環的な系に変換するかだ。この系を表しうるもの、説明できるものにするには、その系に同じ状態に戻らせるようにすることが絶対に必要である。もしこの系が全く際限なしに変形されるものなら、それは分離しうる実在を持たないだろう。ある種のものが保存されたり、再び作られたりすることが必要なのだ。それゆえに人々は、能力や機能というものを発明した。すなわち、与えられた系が常にそう分割されうる、いくつかの部分的で周期的な系を。再び出現し得るある同一の状態を選ばなければならない。だが、そのような意識状態を見出し得るだろうか。現在という概念が役立ちうるのはここにおいてである。この概念は、各瞬間にある種の同一関係（同一形態の）を与えることに帰着する」(III, 866, 1905-06)。

は「同時的なもの」の定義における信号の交換 (XV, 75, 1931) などとしてアインシュタインの時間論にこの「時間の幾何学」を発見することになる。

4）ヴァレリーはベルグソンの影響を否定しているが（例えば XXIV, 762)、記憶と現在の関係としてベルグソンが『物質と記憶』(1896) で記した円錐体に類似した考えを 1921 年のカイエに書き込んでいる。この指摘については松浦寿輝、「ヴァレリーと「記憶」」、『ヴァレリー全集カイエ篇 4』月報 4、筑摩書房、1980 年。

ここで言われる「循環的な系」というのは重要な概念である。精神の中に無秩序に現れる現象に、ある種の規則性を見つけることができれば、そこには循環性、周期性が現れることになるからだ。この回帰点が、同じものを再現する地点であり、その再現のための核となるのが「現在」なのである。ヴァレリーは「現在――オルガノン（体系）」と題された断片の中で、さまざまに変化する心的現象をとらえる核としての「不変元」を探し、それを現在に置くことを強調する。「不変元を求めること――それが「プシュケース・オルガノン（精神の体系）」になるはずだ。あるいは、それについての概念が不変元であるような、そのような変換を求めること――一覧表。それは事物を、原初の混沌、幼年期、物質、夢にさかのぼって再検討することだ。主要な不変元は現在である。ある形式に比較されうるもので、変動し得る。それは、事物や可能な感覚のあらゆる組み合わせによって、同じように定義されるものである。[...] 真の時間は出来事の継起ではなく、反対に、「同一のもの」の継起である。同一のものの復元、同一のものによる「同一のもの」の再＝認知は基本的な行為である[5]」（VIII, 300-302, 1921）。

最初に示したように、ヴァレリーは心的現象を分析する際、ある一続きの状態、すなわち持続の中で観察しようとする。このことと、それらが現れる地点を現在という一点に定めてとらえようとすることは矛盾しないのだろうか。確認しておくべきことは、ヴァレリーの狙いが、現象の再生産にあるということだ。ここで言われる「現在」は、心的現象がある規則に従って再現される場であり、持続の中で観察された結果が再び同じ状態で現れる場なのである。

しかし、カイエを読んでみると、現在にはもう一つの役割があることが分かる。刻一刻と変動する心的現象の総体を、唯一つなぎ止めるものとしての「現在」である。「あらゆる感覚の総体を考えてみよ。それら全ての感覚が任意の仕方で変動すると想定せよ。私はこの総体が何かを保存するというのだ。その何かが「現在」である」（V, 424, 1914）。ここで書かれる「感覚の総体」は、それらが無秩序に時間の継起の中で起こるとすれば把握しにくいものだが、一瞬一瞬をさながらカメラで写し取るようにとらえれば、観察しやすくなる。ヴァレリーは、心的現象をとらえる際に、ある変化の中で連続する状態の一瞬をとらえたのである。この経験は、過去や記憶、知識に頼ることなく、純粋な感覚のみによって対象を眺めるまなざしの描写の中で多く描かれる。そのまなざしでとらえられる風景は、あらゆる感覚の総体であり、主体はその中で意味を切り捨て、感覚の中でたゆたおうとする。「私はそれゆえにそれ（山羊）を見つめる。やがてそれは山羊であることをやめ、オリーヴの木はオリーヴであることをやめる。[...] 我々はみな、過去がもはや存在しないことで一致している[6]」（IX, 804, 1924）。

5）この断章では、現在の六つの様相として、1. 力のシステム、2. 絶対的条件の方程式、3. 普遍的なものと特異なもの、存在と知識の接触条件、4. 行為の接触条件、5. 感覚の条件、6. 見られた物体の総体が挙げられている。

6）この断章については、拙論「ポール・ヴァレリーにおける «un certain regard»」、『関西フランス語フランス文学』第三号、1997 年において考察した。ヴァレリーが描くのは「今、ここ」にある主体の体験だが、この体験にはボヌフォワやコクトーの詩的態度との類似が見られる。

ヴァレリーの現在優先主義はすでに指摘されているが，本論ではそこに二つの方向があることを強調した。すなわち，規則性を手に入れたシステムが同一のものを見出す中心点としての現在と，主体が瞬間の感覚のすべてを受け取ろうとする拠点としての現在である。心的現象に向き合う時の主体はいつも「今」にいる。では，過去や未来はシステムの構築の中でどのように位置づけられるのか。

2. 記憶と予見

フルマン宛の手紙にも見られたように，ヴァレリーは，先入観，知識，記憶など，すでに獲得されたものに基づいて目の前にある現実に向かい合うことを徹底的に避けようとする。これは生涯一貫した態度であり，それゆえ，「始まりから始めること」の重要性を何度も説き，さらに対象を過去に得たものに頼らずに，「今，ここ」で見るまなざしについて，カイエに多く書きつけている。同様の観点から，ヴァレリーは過去について否定的なコメントを多く残す。「思うに，「過去」の徹底的な廃棄，という感覚を私ほど持っているものは，ほんの少ししかいまい。思い出は私をうんざりさせる」(XIX, 627, 1936)，「私は大抵，思い出を全くの無なるもの，あるいは想像上のものと見なす」(XXII, 293, 1939)。このように過去を排除しようとするのは，ヴァレリーの関心が生きた歴史を持つ個人の精神ではなく，過去，個性などから切り離された純粋自我に向けられていたからだ。では，未来についてはどうか。時間とシステム構築の関わりについては先に述べたが，このような探求が結実したとすれば，精神は時間をどのように扱うことができるのだろうか。若きヴァレリーの描いた知性の偶像テスト氏はまさにこの探求を成し遂げた人物として描かれる。テスト氏を特徴づけるのは，精神法則を発見したこと，それゆえに予見（prévoir）ができるということである。

テスト氏は「欲しいものはとっておく。だが難しいのはそこではない。明日欲しくなるものを取っておくことだ。」(*Œ*, II, 17) と言う。精神法則を把握してしまえば，あらゆる心的現象をそれに当てはめられるので，予見も可能になる。テスト氏は，眠りに落ちる前に語り手「私」に言う。「私が未来の病を予見していたことを知っておいてくれ。みなが今確信していることを，私はずっと以前に正確に考えていたよ。未来の明白な一部分に対するこういう視覚を育てることが教育の一部をなすべきだと私は思っている。そうだ，私は，今始まりつつあることを，ずっと以前に予見していた。」(*Œ*, II, 25)

このように，精神のシステムを掌握したテスト氏は，あらゆることを予見する。そこには驚きはない。だからこそ，エミリー・テストは「テストの実質のどこを探しても，一粒の希望もない」(*Œ*, II, 35) と言うのだし，『魂と舞踊』では絶対的知性を評して「冷たい完全な明晰さは，征服することのできない毒薬だ」(*Œ*, II, 167-168) と語られる。しかし，実際の精神はもちろんこのように完全なものではない。そこで，ヴァレリーは未来についてさまざまな思考を重ねる。そして，予見，あるいはそこに至る前段階である予期（attente）に対立するものとして「不意打ち」（surprise）について思いを巡らせる。先に述べたように，ヴァレ

リーは現在をあらゆる知覚の総体であるととらえたが、同時に、そこには常に「残余」(reste) が含まれる (V, 757, 1915-16)。そうでなければ、時間の経過の中で生き続けることはできないからだ。その「残余」の部分が未来へのつながりを生むことになる。カイエの一節によれば、予期とは、メカニズムがすでにできていて、合図のみが欠けている状態、その逆が、メカニズムができていないため、合図があってもそれに適した反応が生じない状態であり、これが不意打ちである (VI, 87, 1916)。不意打ちは、精神の安定した状態を揺るがすものであり、「刺激と吸収の間の均衡が崩れた」状態 (1915, V, 598) と表現される。例えば、「苦痛は身体にとっての「不意打ち」の標識の一つ」(VIII, 566, 1922) である。事実テスト氏は『一夜』の最後の場面で、入眠の直前に苦痛に襲われ、その苦痛を精神のシステムに組み込もうとするのだが、それはかなわない。しかし、だからと言って不意打ちが知的精神にとって排除すべき対象なのではない。不意を打たれるということは、自分の中の既成のメカニズムが追いつかないものに出会ったということであり、ヴァレリーはそこに積極的な意味を見出している。そして不意打ちを「法則と化しうる偶発事、意志的行為と化した偶然、前にはそれを望むことさえできなかったのに、後では是非とも獲得したくなるような偶然」と呼び、「心の蓄えや資源に対して、我々は不確定な予期の状態にある。我々は自分の思考の先を越すことができない。(だがそれの先を越すことができる何かがある)」(V, 611, 1915) と言う。

ここで注目すべきは、不意打ちが偶然と同一視されていることだ。精神のシステムをいくら構築しようとも、精神もまた、マラルメが『賽の一擲』で書いたように、決して偶然性を排除できないのである。『テスト氏との一夜』と同時期に書かれた『ドイツ制覇』において、ヴァレリーは方法と偶然を対立させ、ドイツの勝利として、方法を確立させ、偶然をできる限り排除したことを挙げている。しかし、同時に、精神活動における偶然の重要性についても述べる。「精神とは偶然だ。私が言いたいのは、精神という語の意味そのものが、とりわけ、偶然という語のあらゆる意味を持っているということだ。法則は、この偶然によって影響され、真似られる。しかし、偶然は、よく知られ、意識されたあらゆる法則よりも深く、安定し、親密なものだ。私が思うあらゆる法則は、不安定で限定され、押しつけられたものだ」(*Œ*, II, 591)。法則とは言うまでもなく、ヴァレリーが追求したテーマの一つだが、それに敵対する偶然は、実は精神を生きたものにするために必要なものなのである。これを時間の流れに当てはめるなら、絶え間なく不意打ちに襲われ、偶然に翻弄されて揺れ動く、「今」という時間こそ、ヴァレリーにとって重視すべきものであった。

3. 永遠の現在

精神の混沌とした状態は、次第に整理され、明確なシステムとなって機能し始める。それはさながら、目覚めの時の曖昧な意識が、次第に明瞭になって行くようなものだ。しかし、明晰さは同時に死を現している。全てを把握した精神は、

まばゆい光の中で固定化し、形骸化していくだけだからだ。この明確化の動きに対抗すべく、ヴァレリーは、時を止め、永遠の現在にとどまり続けようとし、それについて、多くの考察を残している。ヴァレリーは早い時期に「時間は―永遠の現在である」（III, 882, 1905-06）と書き込んでいるが、一言で「永遠の現在」と言っても、そこにはいくつかの観点の違いが含まれる。ここでは、一瞬の現在から持続する現在へ、さらにはそれが晩年のヴァレリーにとっての重要な概念である、錯綜体につながっていくことを示す。

感覚によって印象を受け取った後、過去を参照することなくその印象と向き合う限り、主体は「今、ここ」にしかいない。このイメージに関して、ヴァレリーは、聖ヨハネをモチーフにした短い詩を『未完の物語』の中に書いている。「切り落とされた頭は、ありのままの事物、純粋な現在を見る。いかなる意味も、上下も対象も形もなく、ただ多様なものだけがある」（*Œ*, II, 442）。切り落とされた頭は、その瞬間に何を見ているのか？それは網膜に映ったまま、認識されない像である。目に映ってから認識までのプロセスの中には、過去の知識への参照が含まれるが、その参照の途中で切り落とされた頭は、永遠に判断を下されないままの像を見続けることになる。これは現在にとどまり続けることと同じである。

しかし、これはもちろん死者の時間であり、生きる者の時間は絶えず流れ続ける。一瞬の現在が紡がれて、永遠の現在を作り上げていくさまを、ヴァレリーは舞踊論や感性に関する考察の中に書いている。

ヴァレリーの感覚論は、しばしば振り子のイメージで語られる。感覚は、刺激を受け取ったとき、不安定な状態になる。静止している振り子は、刺激によって揺れ始める。その刺激がなんであるかを知覚し、認識した時点で、その刺激はシステムの中に取り込まれ、精神は問いかけに対する答を見つけて、自らの秩序を取り戻す。この時に揺れは止まる。ところが、この振り子が止まらない状態を味わおうとする態度もヴァレリーには重要なのだ。芸術に関する論考で、しばしばヴァレリーは「補完されないこと」（non-compensé）という表現を用いている。刺激を認識せずに、いつまでも味わい続けることは、美を堪能する際の精神の動きである。このように「補完されない」状態が続くことを、ヴァレリーは時間にも関連させて書いている。「時間が我々にとって長く思われるというのは、瞬間が我々にとって補完されぬ刺激として感じられるというのと同じことだ」（XII, 604, 1927-28）とあるように、不意を打たれた主体は、その不意打ちを見極めようとするが、それが見定められない間は刺激の振り子は揺れ続ける。ヴァレリーが自身の「時間論」として書いた「隔たり、遅れ」とは、刺激を与えられた精神が、安定した状態から隔たった状態のまま、その刺激を補完されずにいる揺れを示している。

このように、振り子の揺れが保持され、有限の世界の中で感覚どうしが響き合う、というイメージは、詩論や舞踊論の中でしばしば用いられる。ヴァレリーは1927年に詩について書かれたカイエの断片の中で「倍音」（harmonique）という言葉を初めて用い、以後この概念に何度も言及している。また、1934年に発表し

た『美的無限』の中では、こうした世界を「感性の宇宙」（*Œ*, II, 1344）、「感性的反響の宇宙」（*Ibid*., 1344）という言葉で表現している。この感覚の宇宙では、問いと応答が一対一に対応して完結するのではなく、応答が更なる問いとなって無限に続く。このイメージは舞踊をテーマとするエッセイの中にも見られる。舞踊とは、行為自体が目的であり、それゆえ、それ自体が閉ざされた行為である。踊り子は、自分の足拍子、身振りが構成する完結した世界の中に入り込む。そこは、この世ならぬ世界、外部に参照するものを何も持たない世界である。『魂と舞踊』のアチクテは、知性によって制御された世界から離れ、熱狂によって支配された世界に入る。作品中のソクラテスの言葉によれば「不動で明晰な観察者が置かれたあの哀れむべき状態から、最も遠い状態」（*Œ*, II, 169）に置かれる。この世界は、一つの不安定さがまた新たな不安定を生み、それゆえに永遠に動き続ける世界である。

舞踊論と時間の問題とがはっきりと結びつけられるのが、1936 年 3 月 5 日になされた講演、『舞踊について』である。その中でヴァレリーは聖アウグスティヌスを例にとる。聖アウグスティヌスは「時間とは何か」と自問するが、同様に「舞踊とは何か」と考えた時、ヴァレリーは、舞踊が「時間の一形態」であると思いつく。踊り手は「詩人の生み出すある持続の中に閉じこもり」（*Œ*, I, 1396）、現在の瞬間を紡いだ独自の持続の中にいて、ひたすら踊り続ける。それゆえ、舞踊家は「この世ならぬ世界」にいて、永遠の現在の中にとどまり続ける。そこでは「すべての感覚が、透明な球の中で反響し合う」（*Œ*, I, 1397）。現在という時間は、舞踊の時間と同様、問いかけが解決されずにある時間、刺激が補われないままでいる時間だと言える。

ここまで見てきたように、感性の領域においても、知的活動の領域においても、ヴァレリーは「現在」を優先させてとらえていた。では、精神のシステムにおいて、過去とは単に破棄すべきものなのだろうか。

さきほど、ヴァレリーが過去を拒絶していることを示した。しかし、それはあくまでも過去の中に固定された過去であって、現在と過去のつながりについてはまた別の観点を持っている。現在を中心に据える時、現在を作っているはずの過去はどのようにとらえられるのだろうか。注目すべきは、ヴァレリーは、過去が現在の中で作用し、現在に働きかけるものだと考えていることだ。年代を追って断片をいくつか紹介しておくと、「過去は現在と未来のあいだにある―過去が第一の帰結であり―そして未来が第二の帰結なのだ」（IX, 407, 1923）「現在の衝動は過去を経由する。過去が現在を決定する」（X, 581, 1925）「過去は、過去であることを忘れる。そのこととひきかえに、現在のうちで働く」（XIII, 155, 1928）「もはや再認できない、しかし現在の生活に、現存そのものに―器官として―併合された記憶」（XVI, 503, 1933）などといった記述が見られる。ヴァレリーにとっての時間の経過は、単に過去から現在につながってくるのではなく、現在はまず過去を経由する。つまり、過去を現在の中にとらえた上で、その過去が現在に働きかけるのである。過去は、現在の中に潜み、現在に厚みを与えている。例えばヴァ

レリーは次のように言う。「ひとたびあるものは絶えずある、潜在的に」(VIII, 13, 1921)「記憶とは、「過去」の現在性である。現実態となった過去である」(VIII, 303, 1921)。

さらに注目したいのは、ヴァレリーが記憶に「深さ」の概念を結びつけようとしたことである。「記憶の問題は、浮き彫りの視覚的効果とある類似点を持っている。われわれが深さの感覚を得るのは、二次元の二つの映像を通じて、そしてその二つを組み合わせるあるシステムを通じてである。このシステムは、二つを組み合わせる時に、ただ一つの対象におけるその二つの一致が、浮き彫りという浮き彫りというものの本質をなすあの潜在的運動を強制的に呼び起こす、ということだけを感じさせる。このように、相容れない形象の知覚の二重性を通じて、我々は瞬間の深さ、瞬間の遠さと近さの感覚を得る。現前するものと不在なるものとの同定があるのだ」(XII, 799, 1928)。

記憶とは、かつてあったものを現在に呼び戻すことだ。このとき、かつて在ったもの(不在なるもの)が「在るもの」(現前するもの)となり、瞬間としての「今」に厚みを与える。カイエにはこれに類した記述が多く見られるが、他に、詩的散文においてヴァレリーは同様のことを書いている。夜明けと題された散文で描かれるのは、そこに現れているものの深みである。「この時間に、どれほど私が・・・表面の深み(うまく表現できないが)を感じることか。そして、それが詩なのだ。あらゆるものが、そして私が、いかなる無言の驚きであることか!その時に見えるものは、事物の総体の象徴的な価値を持つ。ある風景は、一つの世界のごくわずかな一部である。その風景は、自分が含んでいるものを隠し、求める」(XII, 190, 1927)。夜明けとは「今在るもの」だけではなく、「これから現れてくるもの」が潜んだ時間である。ヴァレリーはそこに存在と不在の共存を見る。同じ記述が、時間に関する断片にも見出されるのである。

こうして、記憶は潜在的なものとして現在のシステムの機能の中に潜むことになるのだが、これは、1932年、『固定観念』において初めて現れる、錯綜体の概念へと重なっていく。錯綜体とは作品中で「潜在的なるものの総体」と説明されるが、ここで「医者」と対話をする「私」は、この概念を説明するために時間の流れに言及している。世の通念によれば過去、現在、未来の三つに区別される時間は、例えば現在の一点をとらえることで「現在の現在」となり、またそこに「現在の未来」が生まれてくる。これがさらに発展して、「現在の現在の現在」や「過去の過去の未来の現在」などが生まれる(*Œ*, II, 235-236)。このようなあらゆる時の流れを含んだおおもとを、「私」は「錯綜体」と名づける。この概念は、カイエの中でさらに言及され、後には記憶と錯綜体は結びつけてとらえられるようになる。『固定観念』の発表された1932年のカイエでは、「記憶とは最も短い道である。錯綜体の測地点である・・・」(XV, 657)と記され、やがて「錯綜体など」と銘打たれた断章で、記憶が持つ潜在性と、それが呼び覚ます「要求と応答」について言及される。「(記憶という語以外の)いかなる語も、各人の中で潜在的なもの、また――さまざまの刺激に対して――応答として供給され、現実化されるものを

指示しないということは不思議である！」（XXII, 109, 1939）感性の問題と時間の問題が切り離せないということはすでに示したが、時間のみならず、感覚についても、ヴァレリーは錯綜体との関連で分析しようとしている。「あらゆる感覚は潜在性を目覚めさせる。私が「倍音」と呼ぶ錯綜体を」（XXIX, 50, 1944）。

瞬間としての現在に身を置いて、心的現象が立ち現れてくるさまを観察したヴァレリーは、その瞬間に深みを与えてとらえるようになる。記憶という潜在性によって与えられた深みには、「現在」に働きかけてくる過去や、現在の状態から予見される未来だけではなく、主体に驚きを与える「不意打ち」が潜んでいる。その不意打ちゆえに、「私」は現在の「私」を飛び越えることができるのである。

☆　☆　☆

ヴァレリーの時間に関する考察は、システム構築の夢と分ちがたく結びついており、「今、ここ」に現れる心的現象と向かい合うためにヴァレリーは「現在」を優先させている。そして、この傾向は、広く感性の問題、芸術創造の問題にも浸透している。そのため、時間について分析しようとすると、同じような表現が芸術論にも見出され、その共通点を探ることによってヴァレリーの思想が見えてくる、ということが多々ある。時間についての断章に見られるヴァレリーの思想の特徴を敢えて挙げるなら、現在から過去を振り返るのではなく、過去が現在に働きかけてくるととらえ、システムの中で過去と未来を現在に関わるものとして考察した点にあるだろう。ヴァレリーは「今、ここ」に拠点を置きながら、「今」がとらえきれない残余の部分を不意打ちとして、「今」が含んでいる過去を現在に作用する潜在的なものとして考える。この独自の観点は、晩年に着想された錯綜体の概念に結びついていく。システム構築の夢は、錯綜体という、主体が知り得ない自分の潜在的可能性へと発展する。そんな中で、今、ここに顕在しているものは、永遠の現在の中で、過去、そして未来である潜在性によって支えられることになる。その一方で、錯綜体はまた、感性の問題にもつながっており、ここで再び時間と感性のテーマが出会うことになる。このように、時間の問題は、それ自体単独で取り扱われることはなかったものの、ヴァレリーの生涯という「時の経過」の中で、絶えず重要なテーマであり続けたのである。

（大阪教育大学准教授）